

「中国と日本人」 秋山康太郎

今回私は、訪中団の活動で5日間北京に行きました。私の訪中の目的は、以前に語学留学で中国に行った際に、中国に滞在している時が一番中国語を習得できる環境だと思ったので、もう一度現地に行き、交流等を通して中国語を肌でまた感じてくることが訪中の目的でした。また、私は大学で観光の勉強をしているので、中国の観光地や街並みを自身の目で見て中国を知ること訪中の目的でした。

一度中国に訪れたことがあるので、中国の印象やイメージはこの訪中によって変化することはなかったのですが、都市部は高い建物が密集しており、一つ離れてみると大きい建物などは無く、開けた景色が広がっているといった印象があります。そして中国人はとても親切なイメージがあります。実際に今回の訪中で、道がわからなく地元の方に聞いたとき、迷いもなく道案内をしてくれて、それだけではなく、近くまで一緒に来てくれました。こういった経験を通じて、やはり中国には親切な人が多いと感じました。

今回の訪中の日程で北京城市大学の学生との交流会がありました。その交流会では私の班は絵画を描きました。城市大学の学生に描く手順などを教わり、わからなかった時は丁寧に説明してもらいました。そのおかげで無事描き終えることができました。その後その学生と一緒に写真を撮ったり、少しお話をしたりすることもでき、とても有意義な時間を過ごすことができました。

また、千人交流大会がありましたが、人民大会堂の前でバスが停車した時、バス内で隣のバスに乗っていた二人の中国人学生と窓越しで WeChat のアカウントを交換しました。彼らは日本語の勉強をしていて、メッセージでのやり取りは日本語を用いて行っていました。ですが、彼らの日本語が上手であったのでどれくらい勉強したのかと聞いてみると、勉強してから二年しか経っていないというのです。これには彼らの勉強に対する熱心さを感じました。私が留学していた際にも、夜遅くまで図書館や寮などで勉強していた姿を見ていたので、中国人の勉強熱心なところは日本人も見習うべきだと思います。

交流会の他にも、人民広場や故宮博物院、万里の長城に天壇公園といった北京の有名な観光地にも行くことができました。これらの観光地にはとても多くの観光客が足を運んでいました。万里の長城では外国人観光客も多く見受けられましたが、人民広場や故宮博物院では、外国人観光客より中国人観光客の数が圧倒的に多いことに私は驚きました。個人旅行やツアー旅行で来られている中国人もおり、現地の方々がよく集まるような観光地であったので、中国にとって大切な場所であるということがわかりました。

私は中国に行ったのは今回で二回目になります。それと同時に海外に行くのはこれが二回目となります。普段そう簡単には海外に行く機会はないですし、もう一度中国に行きたかったのが、今回訪中団の一員として中国に行くことができ大変うれしく思っています。また、今回中国に行ったことで、もっと中国について知りたいと思うようにもなりました。日中友好協会の皆様、貴重な経験をさせてもらい、本当にありがとうございました。

現在日本と中国は前より良い関係を築いていますが、きっとまだ日本には、このように中国についてあまり良くないイメージを持っている人が多くいると思います。現に帰国して周りの友人に中国についての話を聞いてみると、やはり悪いイメージを持っていました。ですが、中国に行ってみて、悪いイメージより良いイメージのほうが強く印象に残っています。訪中団の一員として行ったからこそ、周りの人に実際はイメージと違うことを伝えたりすることは大事だと思うので、これから中国の良さなどを伝えていったり、自分自身も中国のことを伝えていく身として、さらに中国を知る必要があるので、中国人との交流をするためにも、もっと中国語の勉強をしていきたいです。

「中国についてわかったこと」 石川 大智

今回私が訪中団に申し込んだ理由は来年度中国へ留学する前に、初めての中国また初めての海外を経験しておきたいと考えたからです。私は第二か国語で中国語を選択していましたが、大学に入学してから勉強を始めたので勉強期間は大体9か月くらいでした。自分の言語能力で中国へ行っていいのか不安でしたが、今回集まった日本人学生の中には中国語を勉強したことがないという人もおり少し安心しました。しかし今回の訪中団に応募した日本の学生は僕が普通に大学生活を送っていたら出会うことができない面白い人ばかりで、この人たちとともに中国へ行くことができたのはとてもよかったです。

今回訪れたのは中国の北京でした。初めての場所だったので不安な点がたくさんありました。その一つに気候の問題がありました。北京の気温をインターネットで調べるとマイナスと表示されており、私が住んでいる町仙台より10度ぐらい寒かったのでしっかりと暖かい服装で北京へと向かいました。しかし到着してみると想像していたほどの寒さではありませんでした。大陸と島国では気温は同じでも体感温度は少しずれがあるのだと思いました。また中国は乾燥がひどかったです。事前にこのことは知っていたのでホテルでは寝る前に洗面台に水をためたり、濡らしたタオルを用意したりしましたがすぐに手や唇がガサガサになってしまい大変でした。次行くときはハンドクリームとリップクリームを忘れずに持っていきます。

中国へ行って一番印象に残ったことは買い物です。最初に買い物をした場所は観光客向けのショッピングセンターでした。このショッピングセンターは私がイメージしていた中国らしい店でした。そこでは商品に決まった値段はついておらず店員と客が交渉して値段が決まります。多くの店員さんは完ぺきとは言えないけれど日本語を使って話しかけてきました。堂々と日本語を話している彼らを見て私も勇気が出てきてたくさん中国語でコミュニケーションをとることができました。次に訪れた場所は一般の中国

人向けのスーパーでした。正直私は観光客向けのショッピングセンターの店員さんの圧力や実際の価格よりも高い値段設定に対し毎回交渉しなければいけないのかとうんざりしていました。しかし実際にスーパーで買い物をすると値段は一般的で店員さんも「歓迎」などと優しく声をかけてくれるだけでした。イメージしていた中国のお店とは異なりましたが、一般の人の暮らしは日本と大きくは変わらないとわかり安心しました。そしてもう一つ私が訪れたお店があります。それはコンビニです。まず日本のコンビニと違う点は中国では「いらっしゃいませ」という挨拶をする店はなかったということです。これが良いことか悪いことかはわかりませんが国の違いを感じました。また店員さんが座っている店が多かったです。私が訪れた時間帯が忙しくなかったという理由もあるかもしれませんがこれは日本でも取り入れてもいいのではないかと思います。

今回の訪中で分かったことはほんの一部だと思いますが中国への恐怖感はほとんどなくすることができました。中国へ留学しに行くときも今回の経験を活かしたいと思います。

「本当の中国の姿を知る」 大塚楠月

私は、日中友好協会の青少年代表団の一員として、中国に初めて訪れました。訪中団に参加したきっかけは、学校の方から国際交流に興味がある人はいないかということで声がかかり、もともと海外に興味があった私は、中国について何もわからなかったのですが、挑戦の意を込めて参加することにしました。私は、まず中国と聞いてあまり良いイメージがありませんでした。中国に対する具体的なイメージは、PM2.5による大気汚染の影響で空気が汚い、日本との政治問題があるなど、ぱっと思いつくものをあげてみても決して良いイメージとは言えません。中国人に対しても、日本に来た中国人のマナーが悪いということや怒っている印象が強く怖いというイメージでプラスのイメージとは違いました。

しかし、今回訪中団として中国を訪れて中国、中国人に対する印象が大きく変わりました。空港についてみると、マスクをしないと過ごせないと思っていた空気は、全くそのようなことはなく、日本のおいしい空気まではいかないがそこまで苦には感じませんでした。ホテルに向かう間は、多くの高層ビルが建ち並んでいることにとても驚きました。夜は、見渡す限りのどの建物もカラフルな色に光っていて、とても幻想的であると同時に北京の街の先端をいく技術に驚愕しました。万里の長城を訪れた際には、どこまでも続く道の周囲には城壁が巡らされていて、高い技術が求められるところを奏の時代から作ることでできた中国のすごさを目の当たりにしました。

また、訪中いろいろな場面で中国の方々とは交流しましたが、そこではイメージとは違った印象を持ちました。コンビニやホテル、レストラン、学校で少しではありましたが中国の方々とは面と向かって話す機会がありました。どの中国の方々も私たちが何と言ったらいいかかわらなくなっているとニコッと笑ってくれたり、日本語を話そうとしてくれたり、日本語が分からないときは翻訳機を使って話そうとしてくれてとても嬉しかったのを覚えています。1人の学生からは、自分の持っていた手作りのしおりをプレゼントしてくれてとてもうれしかったです。

訪中を終えて考えたことは、メディアの情報だけで物事を判断してはいけないということです。ニュースでは中国に対する批判的な面を取り上げていることが多いと感じます。そのため、先入観にとらわれ、私を含む多くの人が中国に対してマイナスなイメージに捉えられていると思います。しかし、実際に足を運んでみるとそのような批判的に思っていたところはなく、中国の素晴らしさや中国人の優しさなどに触れることができました。これは絶対に中国を訪れなければ分からないことだったと思います。中国は悪い国という固定概念を持つ人に、理解を深めてもらうためには、実際に自分の目で見て本当の中国の姿というものが分かることが大切であると考えます。しかし、行きたいと思っても実際に行くことは資金面で難しい人もいます。より多くの人に知ってもらうためにも、訪中を経験した私たちがどんどん中国の本当の姿を発信していく必要があると思いました。

私の中でもう一つ印象に残っていることがあります。それは、日本の学生との交流です。私は、3年間大学生活を送ってきませんが、あまり他大学の学生と関わることはありませんでした。そのため、今回の訪中団の学生と訪中で、とても充実した5日間となりました。また、彼らの行動力や考え方などに大きな刺激を受けました。この出会いを無駄にせず、今後の生活に生かしていけたらなと思っています。

最後に中国政府の方々、通訳さん、添乗員さんには素敵な計画と素敵な案内をしていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいです。中国についてあまり知らない私でしたが、今回の訪中を通して中国という国にとっても興味をもち、もっと中国について知りたいと思うようになりました。本当にこの経験をさせていただき、私の中で中国の存在が大きくなったと思います。帰国した今、日中の友好の架け橋となれるよう、様々な分野で努力していきたいです。本当に貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

「これからの日中関係」 興津圭太

私は訪中団に応募したのは「大学で学んでいる中国語を実際に使い、中国人学生や現地の方々とは交流し、中国の文化への理解を深めたい」と考えたためです。しかし、私は幼い頃中国に対してあまり良い印象を持っていませんでした。私が幼いころにみ

たのは「食品衛生問題」「パクリ疑惑」「大気汚染問題」などのニュースばかりだったためです。なので、私自身中国という国は日本より遅れていて、汚いという先入観がありました。しかし、私は高校の世界史の先生が話してくれた中国企業の「アリババ」の話を聞いてから中国に少し興味を持ち始めました。そこで、大学に入り中国語を学び始め、中国に関する授業などを履修し、実際に中国にも何度か足を運びました。メディアを介してではなく、自分の目で見た中国は想像をはるかに超えているものでした。そこにあったのは「発達したインフラ」「高層ビル群」「IT技術」など、私が幼いころに思い描いていた「後進的」な中国とは全く異なっていました。

私自身、今回の訪中が初めての中国ではなかったのですが、中国に対しての見方や考え方が大きく変わったという事はありません。しかし、今回の訪中では現在通っている大学の枠を飛び越え、国際的な視点を持った日中の学生たちと交流できたのは非常に良い経験となりました。特に今回のプログラムの中に組み込まれていた、「北京城市学院の訪問」と「人民大会堂での交流会」はとても素晴らしい経験となりました。北京城市学院では私は中国画の体験をしました。中国語や中国文化、歴史などについて学んだことはありましたが、中国の芸術に触れて実際に体験する機会は今回が初めてだったのでとても良い経験となりました。またよくニュースや新聞などで見る人民大会堂に入り、そこで交流会に参加できる機会は非常に貴重でした。

そして、中国のレンタルオフィスの企業の見学などの機会をいただきました。レンタルオフィスの普及はこれから起業する新興企業を後押しできる素晴らしいビジネスモデルであると感じました。日本にもレンタルオフィスビジネスは始まっていると聞いたことがありますが、今回北京で見学させて頂いた企業をはじめとする中国のレンタルオフィスビジネスほど浸透していないと感じています。こういった新規ビジネスにおいて日本もより進んでいる(浸透している)中国から学ぶ姿勢が必要なのではないかと考えさせられました。

私は今回の訪中団に参加する前に毎年NPO法人が行っている、日中双方の印象調査の結果を見ていました。結果としては中国人が日本に対して「よい印象を持っている」と答えた人は、過去最高の40%を超えてましたが日本人が中国に対して「悪い印象を持っている」と答えた人は80%を超えていました。しかし、今回交流会などで交流した中国人の方々は非常に親切に私たちの訪中を歓迎してくれました。私は現在の日本に漂う嫌中ムードは変えていけなくてはならないと考えています。このように中国に対して「悪い印象を持っている」と答えた人の多くは実際に中国に行ったことないのではないのでしょうか。私としては実際に中国に行き、その目で中国見てこそ相互理解に繋がると考えます。今回のような訪中団の活動を通して、また個人旅行でも多くの人が中国現地に行き、そのうえで中国に対する考えを自分なりに持つべきだとより強く思うようになりました。

「はじめての中国」 親泊一真

私が北京へ行くことになったのは、私の知り合いである教授が中国語学科を担当されており、その方の推薦でした。正直に言うと、出発する前はまったく中国に関心がありませんでした。私は英語英文学科に所属していることもあって、英米文化ばかりを勉強し、一番近い中国などのアジアにまったく目が行っていませんでした。なおかつ、たった1万円で行けるという踊り文句に興味をもってしまい、動機としては不純でしかありませんでした。ただ、卒論のテーマとして世界経済システムを研究しており、その一環として世界各国の歴史や文化を学びたいとも思っていたので、その機会になればと参加することを最終的に決定したのですが、行く前と後では、中国に対しての見方が少し変わりました。

たとえば、日本のメディアが中国に関して報じるニュースでは、大抵、事件であったり、杜撰な実態を暴くドキュメンタリーであったりと負のイメージが多く、大気汚染の印象も無意識に染みついていたので、北京も大気汚染が深刻で治安が悪いのだと勝手に思っていました。しかし実際に見た街並みは、むしろ日本以上に清潔で、空気も殆ど汚れておらず、土地が広いめかすっきりとした印象を持ちました。北京以外の都市がどのような様子なのかわかりませんが、少なくとも北京は東京以上に住みやすそうだなと率直に感じております。

天安門と万里の長城を訪れた際には、これまたスケールが大きく、1日では到底回り切れないくらい、多くの歴史が詰まっている印象を受けました。日本の文化遺産は、良くも悪くもコンパクトであり、スケールの大きさに日本にはない新鮮な感動を覚えました。天安門広場は、世界史の教科書でしか見たことがない光景であり、実際に門の前に訪れた際に大きな人物写真が飾られているのを見て、どうやって額縁を括り付けているのだろうと疑問に思いました。そしてそれ以上に衝撃的だったのは、その門を潜り抜けた先に、延々とつづく門がどこまでも広がっていることでした。詳細は分かりませんが、その門ひとつひとつに意味が込められており、中国3000年の歴史を肌で感じるような、歴史の奥深さを見せつけられた感じです。途中途中で土産や見世物があり、さらには中国古来の骨董品を展示しているブロックが軒を連ねていたり、歴史を感じられると同時に、もっと中国の歴史を学んでからここを訪れれば、さらに楽しむことができたのだろうと惜しく思いました。どんな国に行ってもそうですが、歴史を知っているのと知らないのでは、文化遺産を観光しての楽しみが、何倍も違うと思います。大学生のうちに、もっといろんな知識を蓄えていこうと決心した瞬間でもありました。

万里の長城では、まず標高の高い場所であったため、とてつもなく寒かったことと、部分的に現れる踊り場のような休憩スペースを除いて、ほとんど上り坂の階段が続いたため、ただただ苦行でした。坂だったらまだしも、段差がある階段のため、足を上げるのもだんだんしんどくなってきます。昔の人は、この階段を使ってものを運んだり目的地へ向かっていたのだと思うと、現代の自分

たちがどれだけ便利な時代を生きているのかと身に詰まされます。最終的には一緒に上っていた友達にも追い抜かれ、やっのこと目的地に着いた頃にはへとへとになって感情を失っていました。日本に帰ったらもっと運動しようと決心した瞬間でした。

この5日間をとおして、中国という国が今まで以上に距離が近く感じられるようになりました。むしろ日本に一番近い国は中国だったのですが、あまりそういう実感が湧かず、この経験を通して、中国をさらに身近に感じ、再度中国を訪れて、いろんな場所を練り歩きたいなど考えるようになりました。5日間、貴重な経験を与えて下さった日中友好協会のみなさまに、深く感謝申し上げます。

「中国人学生たちのパフォーマンスから感じたこと」 北川真帆

訪中前と訪中後の中国人に対する印象は変わりませんでした。私自身、今回は2度目の中国訪問でした。1度目は広州に語学研修で2週間滞在しました。大学の寮に宿泊していたので、この期間中は中国人学生と話す機会があり、また多くの中国人と接しました。この2週間の生活から、中国の方々はとても親切で優しい印象を受けました。日本で報道されるような中国人のイメージとは全く違う、温かみのある方々ばかりで、日本の報道のような固定概念を持ったまま訪中した私にとっては、予想外の印象でした。こういった経験があったので、今回の訪中に際しても、中国に対し良い印象を持ったままでした。今回は中国人と話す機会はあまりありませんでしたが、紫禁城の訪問や、万里の長城などの、中国の古からの歴史に触れることができましたと思ひますし、事前に本を読んで基礎知識をつけたうえで訪れたので、昔の人々の思いや生活に思いを巡らせ、感慨に耽りながら堪能することができました。

今回の訪中を通して、私が一番印象に残っていることは、中国人学生との交流です。学生とは直接的に関わることはあまりありませんでしたが、歓迎会の出し物や、大学訪問の際に交流する機会がありました。歓迎会でのオタクのダンスパフォーマンスや、アイドルのダンスなどを拝見し、中国の学生達の間で、日本のサブカルチャーが浸透していることがわかりましたし、広く受け入れられていることがわかりました。きっかけはどうであれ、日本に興味や関心をもってくださっていることは、日本人としても非常にうれしいですし、喜ばしい事だと思います。また、日中大学生千人交流会では、中国の伝統的な踊りや書の披露などもなされていました。私はこれらのパフォーマンスの内容が非常に印象に残っています。私が感銘を受けたのは、オタクやアイドルのダンスなどの日本の若者文化を発表する学生だけでなく、自国の伝統的な舞踊などの文化を発表する学生がいたということです。私は幼少より日本舞踊を習っています。お稽古しているのは古典舞踊で、主に江戸時代に作られた舞踊を練習しています。今回、事前研修の自己紹介の際に日本舞踊について班員に話しましたが、ほとんどの人が存在自体知らず、盆踊りと区別がつかない人が多かったです。その時に、私は日本人の自国の伝統的な文化に対する認識の低さを感じましたし、わずかながら寂しい思いがしました。現状として、若い学生が知らないということでは、このままでは将来、日本人にこの伝統芸能の存在さえも忘れられるのではないかと思います。しかし、中国の学生の伝統舞踊を拝見し、学生たちが自国の文化である舞踊を披露し、踊り継いでいることに感動しました。私たちと同じ若い世代の学生が、伝統芸能に取り組んでいることに対して、文化を残していこうという思いが伝わってきましたし、優雅な舞踊の中に、自分たちの文化に対して誇りを持っているような凛とし雰囲気を感じました。

今回の訪中では、中国の現状や歴史的建造物などを見ることができた非常に貴重な機会でした。またそれだけではなく、現地の学生の伝統文化に対する姿勢や向き合い方にも刺激を受けました。日本も中国同様に歴史が長く、多くの伝統的な文化や芸能があります。中国の学生のように、自国の文化を理解し発信していくことは、日本人学生もこれから向き合っていくべきではないのではないかと考えさせられた訪中でした。

「会話の重要性について」 今野友貴

今回の訪中団は準備期間が少ない中で企画されたため中国人の学生の方と交流する機会が少なく、中国という国について知ることはできても人間について知ることができないので学びが少ないのではないかと考えながら訪中団に参加していました。しかし、訪中団にて案内をしてくださった北京第二外国語大学の方の話がきっかけで中国人や同じ日本人同士での付き合い方について大きく考えさせられることになりました。

それは帰国のため空港に向かうバスの中で「よく日本人の方は中国に対して偏見があったとおっしゃるが、今回の訪中団の学生の中には積極的に話しかけてくださる人がいて、今までの日本人のイメージとは異なり、驚かされた。自分にも偏見があることに気づいた。日本人の学生はもっとオープンな態度をとれば積極的な交流ができると思う」という話をされていて、訪中団としてではなく普通の1人の学生としての自分自身を振り返ると反省点があり、2つの学びを得ることができました。

1つ目は、外国人に限らず同じ日本人同士でも偏見があるということ、それを取り除くためには積極的な会話が重要となっていくということです。

以前の私は、話し相手の第1印象が良くないとその人のことを勝手に印象づけて自ら避けるようにしていました。

しかし、訪中団では多くの学生と話をしていく中で国籍に限らず偏見があることに気づけたので今後、人と関わっていく上では第1印象がどれだけ悪くても、その印象は相手の本性ではないからまずは話をしてみないとわからないと相手との会話を重要視することができるようになりました。

2つ目は、同じ大学にいる中国人留学生との交流をもっと大切にすべきだということです。

訪中団以前は大学で中国人留学生とよく会話はしていたのですがあまり深い話をすることはできていないことが多いと感じていました。

しかし、訪中団で中国人と会話したくてもなかなか会話できなかったという環境や自分や周りの日本人学生の積極性を振り返ると大学での自分の会話はオープンな態度ではないなということに気づきました。

まずはオープンな態度で留学生と接する。そして積極的な会話でお互いを知ることで偏見を取り除くことができるということを意識していこうと思います。

さらに訪中団での日本人学生同士の交流は、中国語の学習方法や外国人との様々な付き合い方について情報交換する機会にもなったので中国という国を知れただけではなく、外国や外国人との付き合い方の様々な方法を知れました。今後、この方法を取り入れていけば必ず大きな成長に繋がられるはずなので訪中団で多くの成長のきっかけをいただきました。

最後になりますが、今回の訪中団を実施前から準備して最後まで支えてくださった日中友好協会の皆様ありがとうございました。また企画・運営をし、風邪を引いた私に対して臨機応変に対応してくださった中国日本友好協会・北京市人民対外友好協会の皆様には感謝してもきれません、貴重な中国での学びの機会を与えてくださり本当にありがとうございました。

「訪中を終えて」 佐々木 七菜

私にとって中国は四回目の訪中となりました。行くたびに、そして行く仲間が変わるだけで見る世界、考え、が変わり、今回の訪中でもまた私の世界は広がりました。

中国に行く前の事前研修で北海道だけではなく、全国の大学生と交流することができました。北海道以外の学生と交流する機会はなかなかない機会なのでとても新鮮でした。みんなが今までやってきたこと、これからやりたいことなどを聞くのがとても刺激を受けました。それぞれ学校も違えば、学科、年齢も違う中で中国を通してたくさんの仲間に出会えたことを心から嬉しく思います。

北京の観光地にも行かせていただきました。天安門や、故宮博物院、万里の長城など歴史的建造物を見れて日本にはないものや日本と似たものなどがあり、とても楽しく、時間が一瞬で過ぎ去ってしまいました。万里の長城では階段の段差がばらばらで、しかも約二万キロという距離を昔の人が頑張って積み上げて外敵から国を守っていたのだと考えると重機などはない時代なのに知恵を出し合いながら積み上げてきたと考えたと感動します。故宮博物院ではラストエンペラーの舞台となった場所もあり、名前は聞いたことがあるだけのラストエンペラーだったけれども、実際に映画を見てみようとも思いました。また、普段入ることはできない人民大会堂へ行き千人交流大会へ参加しました。中国人でも行くことがなかなかできない場所に招待され行くことができ放蕩に貴重な体験でした。中国の伝統の舞踊であったり、日本の歌をオーケストラと合唱で歌ってくださったりしました。また、日本側からは少林寺拳法の方々が少林寺拳法を披露したり、「朋友」を歌ったりととても有意義な時間でした。中国ではホテルもきれいで、ご飯も毎回円卓でとてもおいしかったです。留学をしていた時は食堂に行き写真を見ておいしそうなものを選んでいたので日によってハズレや当たりの日があったのですが、今回出てきた料理はほとんどがおいしかったです。しかも教科書でよく見かける全聚徳へ行くことができ、念願の北京ダックを食べることができ本当に幸せでした。

今回の訪中は四泊五日と決して長くはなかったけど、とても濃い時間を過ごすことができました。最後のバスの中で翟さんの言葉がとても印象に残っています。翟さんの通う大学では交流をする日本人はあまり積極的ではなくあまりいいイメージを持っていなかったといっていました。しかし、今回の交流で積極的に話しかけてくれる人がいてイメージが変わったといってくれました。私はこの言葉をとてもうれしく思いました。私たちがこのような交流をすることによって日本に対するイメージが変わってくれて、中国に関わってよかったと思いました。中国語を勉強していて本当に良かったと思いました。日本には中国のことをよく思っている人はあまりいないと思います。実際、私がバイト先にお土産を買っていった時も、中国のお菓子だから何か変なものが入っているのではないと言われて、とてもいやな気持ちになりました。現状中国について知る人はあまり多くなく、悪いイメージを持っている人が多いと思います。このイメージを変えたい。中国人は人間性がとても豊かで付き合いをとても大切にします。技術も向上しており、QRでの決済は当たり前になっています。中国は悪いことばかりではないことを知ってもらいたい。そのために私は何ができるのかをしっかりと考え、訪中団で学んだこと、体験したことなどを活かし日本が中国に持つ悪いイメージを変えていきたいと思えます。

「百年修得同船渡、専念修得共枕眠 一期一会」 高木茜実

北京の街はとにかくキラキラしていて、どこまで行ってもビル、ビル、ビル…という感じで、中国の発展ぶりに圧倒され言葉も出ませんでした。街並みや建築物のデザインが洗練されていて、100年後の未来を見ているのかなと思ってしまうほど時代を先取りしていて、息を飲むばかりでした。

中国の人々は、人情深く、繋がりを重視する、温かい人が多いなという印象を受けました。日本を含め世界中の先進国で個人主義志向が強まっている中、他者とのかわりに重きを置く中国の文化は、私の目にはどれも新鮮で魅力的に映りました。ホテル内や道端を歩いているとき、スーパーに買い物に行ったときなど、様々な場面で、中国の人々の温かさに触れることができました。

また言葉が通じないことにとってもどかしさを覚えました。私は今年4月から中国語の勉強を始めましたが、将来中国語を使っていくことを考えると、今の勉強ペースでは遅いと実感しました。現地の人と流暢にお話している大学生を見ると羨ましく思いました。そしてもっと語学力に磨きをかけようとエンジンが付き、モチベーションが上がりました。

全国各地から集まり共に訪中した大学生たちの間で友達の輪を広げることができたのも大きな収穫でした。私は北海道に住んでいるので、海を隔てた関東や関西の大学生と交流する機会は今までほとんどありませんでした。みんな積極的で熱意があり賢くて、同じ大学生でもこんなに頑張っているんだ、こんな考え方を持っているんだ、と思いたくさんの刺激を受けました。こうした機会を与えて下さった日中友好協会の皆様に大変感謝しております。

何より、志の高い素敵な大人たちと出会えたことが、自分の思い描く未来像に大きな影響を与えました。皆さんそれぞれお忙しい中、たくさんの時間とエネルギーを使って、私たちに素晴らしい経験をさせて下さったことに、感謝の気持ちでいっぱいです。キャリア形成や将来についてのアドバイスを真剣にしてくださる皆さんはとても輝いていて素敵でした。私の憧れの存在です。私も積極的に行動を起こし、日中友好促進の活動にこれからも携わっていきたいと考えております。

今回初めて訪中して、目に映るものすべてが新鮮でワクワクして、帰りたくないと思えました。中国で沢山の刺激を受けて、中国が大好きになりました。しかし、今回見たり、経験したものは、中国のほんの一部なのだとすることを忘れないようにしたいと思っております。今回の訪中は政府や周りの大人たちに守られており、普通ではありえないような良い待遇をさせていただいたため、何一つ不自由なく、中国の良い部分のみを見て、5日間の工程を終えることが出来ました。観光気分、旅行者の視点から中国の良い部分のみを見ていたと思います。気分的にも興奮していて、日本との様々な違いも面白いと感じられる、そんな5日間でした。そのため、次回中国へ行くときは、今回経験したことが中国のほんの一部でしかない、と言うことを念頭に置いて、中国を様々な角度から見る事が出来るよう長期滞在をしたいと考えております。日本と中国の文化を比べ、どちらが優れている、劣っているのではなく、両方の文化体系を受け入れ、先方の文化と自分の文化をうまく統合できることを目指したいと考えております。

通訳のボランティアとして添乗をしてくださった北京外国語大学の学生が、帰りのバスの中で最後に語ったスピーチがとても印象深く私の心に響きました。それは中国と日本双方に存在する両国に対するステレオタイプの話でした。政治評論家のリップマンの言葉で、「私たちはたいていの場合、見てから定義しないで、定義してから見る。外界の、大きくて、盛んで、騒がしい混沌状態の中から、すでに私たちの文化が私たちのために定義してくれているものを拾い上げる。そして、こうして拾い上げたものを、私たちの文化によってステレオタイプ化された形のままで知覚しがちである。」というのがありますが、それがその学生の話にそのまま当てはまると思ひ、強く共感しました。多くの方はまだ、私たちの生活を便利にするために都合のいいように作られたステレオタイプの中で生きていると思ひます。今回初めて訪中して、「百聞は一見に如かず」を体感しました。その経験をもっと多くの人にもらいたいと思ひます。今度は自分が日中友好協会の一員となって、経験させていただいたことの恩返しを、次の世代にも引き継いでいきたいと考えております。

一生のうちで誰もが経験できないような、貴重な経験をたくさんさせていただきました。すべてが宝物で、私の成長の糧になっています。今回感じた気持ちを忘れないように大切にしながら、日本でもさらに頑張ります。本当にありがとうございました。

「訪中を通じて」 高橋舞衣

大学生訪中団としての1週間は本当にあっという間でした。初めて訪れた北京という都市で交流や視察を通してたくさんのことを学び、考え、感じる事ができました。

私の大学の学科教授は外国に行くこと、今までのイメージと比較すること、そこで得たものを自分の人生経験に生かすことをよく勧めてくれます。実際に私も外国を訪れてイメージとは違うことを経験し、それまでとは違う考え方を学ぶ事ができました。ですから、今回も中国を訪れる上で中国がどんな国でどんな人がいるのかを自分なりに考えてみました。世間的には日中関係を取

り上げるメディアの影響のせいか、中国をいいものとして見ていない人が多い印象にあります。しかし、私はそこまで悪いイメージはありませんでした。とは言っても、不安はかなりありました。外国に行ったことがあるから大丈夫だろうと考えていましたが、中国について調べてみると、例えば環境面でpm2.5などの空気汚染やトイレ、さらには治安も心配になりました。中国人について考えてみると声が大きく、どこか無愛想で日本人のことを好いていないイメージが湧きました。確かに環境については日本の方が安全だとは思いましたが、人に対する印象は変わりました。大学生との交流では中国のことや自分の大学生活のこと、日本を訪れたときのことを楽しそうに話してくれました。また万里の長城を登った際も、すれ違う中国人の方に「加油!」と励ましてもらいました。他にもホテルの清掃係のおばさんとも少しお話できたことも思い出です。今回の訪中で私が日本人だからと言って不便な思いをすることはありませんでした。結局は一人一人なのであって、「中国人」とひとくくりで見るのは正しいことではないと考えました。自分の目で実際に感じなければならぬことがたくさんあることを痛感しました。

興味を持つことが理解することへの第一歩になるということも実感しました。もしも大学に入学して第二外国語で中国語を選択していなかったら、今回の訪中に参加することを選んでいなかったら、中国のことをこんなに知ろうとは思わなかったし、気持ちや意識が変わることもなかったと思います。中国語を選択した理由は、隣国であるからきっと活用する機会は多いだろうということと、英語と並んで多くの人が話せる言語で、これから話せて便利になるだろうとなんとなく履修を決めたところがありました。しかし今回のこういった体験を通じて語学だけでなく、文化や歴史についても勉強したい、もっと中国について知りたいと思うようになりました。

私は今回の訪中をきっかけに目標ができました。一つ目は、自分の中国語のレベルを知ることです。今回の訪中には一年生から四年生まで、留学経験者や私のような初歩レベルまでたくさんの人が参加していました。大人数で行動することが多かったため、どうしても先輩方に頼ってしまうところが多く、自分から積極的に中国語を使うことができませんでした。間違いを恐れることなく使うことや、そもそも自分の語学力に不安を感じないほどのレベルにまで上げたいと強く思いました。とはいえ、現地の人の言っていることを聞き取れたときは嬉しかったし、これからのモチベーションにもなりました。二つ目は、中国についての理解をもっと深めたいです。日本と中国は隣同士の国で日本の歴史を振り返ると中国から影響を受けたものが多くあります。訪中前は違う国だから、と相違点を探そうとしていましたが、違いを見つけること以上に共通点を見つけていくことが日中友好、隣国理解につながるのではないかと考えました。

今回の訪中だけで中国のすべてが分かったわけではありません。中国はとても大きい国でまだ一部分しか見ていないからこそ、これからもっと深く追求していきたいです。今回、日中友好大学生訪中団に参加することができたこと、初めての中国訪問がこのような普通の観光では味わえない貴重な機会であったことを大変嬉しく思います。ここで学んだこと、感じたことを誰かに伝え、これからの生活に生かしていきたいです。

「自発的行動を養う」 鶴田雅也

今回の中国訪問を振り返ってみると、大変有意義なものであったと考えています。

私が中国語の学習を始めたのは大学に入ってからですが、今回の訪問を含めて4回北京に訪問しました。それまでの3回は短期留学と旅行の為に訪問しており、今回の訪中とは異なる面があったと感じています。よく日本では政治的観点の問題から、中国に対して嫌いな国だとする意見をよく見ます。ただ、これはあくまでも日本のメディアによる報道を見ての感情論で判断している意見が多いです。では実際に身近な友人に、「じゃあ中国人の事が嫌いなのか。」という質問をしてみると、「うるさいから嫌い」だとか、「礼儀がない」というような意見しか出てきません。ただ、中国に限らず、それぞれの国にはそれぞれの文化があり、考え方や習慣があるのです。そのような背景を知らず、批判を述べることは、あってはならないことだと私は思いますし、他人の事をわかろうとしない姿勢が考え方の幅を狭め、人間的な成長を促進しないものだ、以前から考えています。

さて、では私自身今回の訪中活動参加においてはどのような目的があったのか。主にそれは2つあります。1つは自身の中国語のレベルを再確認し、訪中団の仲間と共に友好をアピールすること。2つ目は、今までの自身の訪中時には知りえなかったことを知り、経験することです。結果的に言うと、あまり多く新しい発見が出来たわけではありませんでしたが、再認識が出来た場であったと同時に、中国に対してではなく、日本人に対しての発見が自身としてはかなり印象的でした。

今回の訪中団では中国語を学習しているかの有無は関係なく、基本的に皆友好に関心がある人が多かったように思います。ただ、この友好にも二種類あったと思います。それは本当に国際交流がたくて集まった人と、参加した人と仲良くなって観光を楽しみながら中国を満喫する人がいたと思います。人の本心は分かりませんが、私にはそのように見えました。そして基本的にこの参加目的の違いによって決定的な差がありました。それは、自発的に行動できるかできないかという問題です。今回、直接中国人と交流を深める機会は少なかったですが、あることがありました。歓迎会の夜に一緒に食事をとった時の事ですが、同じ席に座ってくれた中国人学生に誰も声をかけず、隣の日本人とばかり喋っており、若干自分がその中国人学生に話かけつづけるというようなことがありました。その中国人学生も内気な性格でしゃべりにくかったというのものもあるかもしれませんが、正直、この事に対しては憤りを感じました。途中で発覚しましたが、彼らは「中国語がしゃべれない」という理由でコミュニケーションを取ろうとしなかったのです。折角の機会なのに、自分のやりたいものだけに熱中し、視野を狭くしてしまうこと。これは最近の日本人の悪いところだ

と私は思います。こんなことでは交流活動なんてできるはずがありません。つまりこれはある意味、内向的な性格であるということが出来ます。客観的に物事を捉えられるようにしなければ国際交流は疎か、日本社会においてでさえ評価されないものになってしまうとだと考えています。勿論、私と同じように国際交流活動をしていきたいという人とは、普段どのように生活をしていて、普段どのような考え方をしているかなどを共有できたのは素晴らしいことでした。

私は将来ボランティア活動を通じて日本の良さや中国の良さを互いに知り、一緒に暮らしていけるような環境を身近なところから築いていこうと考えています。そうしたときに、やはり様々な人がいる中で、如何にお互いの国を好きになるような活動ができるかを今後考えていきたいと思っています。今回、少々批判のようになりましたが、私がしたいのはそうではありません。日本人にはいざという時に内向的である人が多いということが今回の発見でした。そういう面で見ると、自分の考えをはっきりと示す中国人の態度はかなりお手本であると思います。自分もより努力し、彼らのようにはっきりと自分の考えを発言できる、そのような力を養っていきたいと思っています。それは本当に社会にチャレンジできるかできないかの極めて重要な一要素でもあると考えています。

今回感じたことは以上の通りでしたが、同じ班の仲間と一緒に楽しい時間を過ごし、仲を深め、一緒に過ごした時間は5日と、早いものでありましたがとても貴重な時間を提供していただきありがとうございました。

「初めての刺激が変えたもの」 内藤晃史

私は今まで、日本と中国の関係性について、あまりよく思っていませんでした。近代史における政治的経済的思想の違いや領土問題、国境を越えた環境問題、そして科学開発競争。あたかも、中国と日本は敵であるかのような情報がニュースでも多く取り上げられていたために、私も自然と中国のことをよく思っていなかったのだと思います。

しかし、今回私が青少年団の一員として訪中すると決定通知書がきてから、改めてその考えを見直し始めました。冷静になると、その考えはすべて自分自身が形作ったものではないのだから、あまりにも早とちりなのは。そう思った時から、私の中国に対する考え方は変わり始めていたのかもしれない。

そして、迎えた中国訪問の日。私は今回の訪中が、人生で初めての中国への渡航でした。今まで写真や映像でしか見たことのない建造物や雰囲気、料理、環境。何もかもが自分にとって新鮮で、かけがえのない経験になりました。5日間という中国を知るには少々物足りない期間ではありましたが、その5日間だけで私の中国に対する興味はとて高まりました。中国の文化や風習、歴史。とにかく何でもいいから中国のことをもっと吸収したい。そう感じるようになりました。

そのように私を変えたのは、大きく分けて2つあります。1つは、今回の訪中で中国を五感で味わうことができたからです。実際に中国人の学生さんと関わる機会は少なかったものの、中国の観光名所や食べ物、雰囲気を自分で味わえたのは人生の中で初めてでした。これらの刺激によって自分の中の中国に対する先入観的なネガティブな考えが無くなりました。と同時に、今回訪れたのは北京であり中国はもっと広い、となると、もっと多くの私の知らないことがあるはずだということに気づきました。そして、中国のことをもっと知りたいと私は思うようになったのです。

そしてもう1つは、訪中団を介して中国に興味のある多くの日本人に出会えたことです。

行動班が同じ人、班は違えども同じ大学生として今回の訪中に参加している人、随員の方々。5日間を通してその多くの人から、巡った場所に関する話、以前中国に留学したときの話、そして、なぜ自分は今回の訪中に参加しようと思ったのか、これから自分はどう中国と関わっていききたいか、といった様々な話を多くの人から聞くことができました。これは、普段の大学生活では絶対に経験できない、といっても過言ではありません。

殊に、一緒に行った大学生の人達については中国への留学経験者が多数いて、その人たちの話はとても面白いものばかりでした。その話を聞いて、今まで全く眼中になかった「留学」を試みたいとも思うようになりました。

これら2つのことは私の中国に対する考えを改めただけでなく、これから自分はどのように中国と付き合いしていくべきかというのを考えるきっかけともなりました。

昨今の科学技術の進歩のおかげで、人の移動も文化の交わりも盛んになってきました。いわゆる、グローバル化が進んでいるのです。

そのグローバル化の中で重要なことは何か、と問われたら私はどんな時でも「相互理解」と答えます。相手のことを知らずして仲良くなれるわけがない、と私は思うのです。

これは日本と中国との関係にも言えることではないのでしょうか。

決して今の2国間の関係が悪いとは思いません。しかし、近隣国同士としてより密な関係を築き上げていくためには、より多くの

人が相手国のことを知ることが重要であると思うのです。

私は今後、たとえ政治的な対立があろうと、中国の文化に触れる機会や中国人との交流を盛んにしていこうと思いました。

「中国を訪問して感じたこと」 濱尾かれん

私が今回この訪中団に応募させていただいた理由として、もともと海外強く興味を持っていたこと、また中国を訪問したことがなく、今回訪問できる機会をいただくことができると聞き是非とも参加したいと感じたためです。大学の授業で中国語を学んだことはなく、食物栄養学科として中華料理を調理したことがあるくらいでした。本物の中華料理を食べれるということも、参加する大きなきっかけの一つでした。

中国を訪問する前の事前指導の際に、まず日日交流として、班のみんなと交流する機会があり、私はまずその交流で自分の価値観が変わったような気がしました。まず同じ班の中で、中国語を話せる人、中国に留学した経験のある人、これから留学予定の人と学年を問わずほとんどだったので、私の知らない世界はどれだけ視野を世界に向けているのだろうと感じました。常に自分にとって新しい経験を積んでいきそれを自分の生き方に貢献させていて、すごく刺激を受けました。

訪中の目的は、少しでも中国語を話せるようになること、同世代の中国の方と交流すること、日中文化の違いを感じることに、本物の中国料理を食べることでした。万里の長城に上っているとき、私は体力的に途中であきらめてしまいました。友人たちが戻ってくるのを待っている間、万里の長城の保安さんが中国語で話しかけてくださったのですが、私は一言も中国語を話すことができず、「I'm Japanese.」しか伝えることができず、もし少しでも話せる語力があればこういう場面で現地の方とコミュニケーションをとることができ、自分自身勉強にもなったのだろうと感じました。コミュニケーションを取りたい気持ちはとても強くありましたが、話すことができずこんなにももどかしい気持ちになったのは初めてでした。2020年のオリンピックを直前に控え、日本各地で外国の方を多く見かける機会が増える中で、中国語に限らず主要となる言葉はある程度話せるようになるべきであると感じました。本物の中華料理を食べることは、毎食色鮮やかな食事、食べたことのない料理がたくさんあり、私の食経験の一つとしてとてもうれしかったです。日本の料理に似ているものもあり、とても食べやすかったです。中華料理のイメージとして、激辛のものをイメージしていましたが、どちらかというと辛い料理は少なく、辛い料理が苦手な人でも、中国に来て問題ないと感じました。中華料理を食べる中で、一つ感じたことがありました。日本は食品ロスを減らそうと国を挙げて政策を練っていますが、余るほどの食事でおもてなしすることがマナーとなる中国と、この違いは世界的にどうなのだろうと感じました。日本だけが食品ロスを意識しても、小さな島国一つでは環境問題も解決には向かわず、今なお人口が増えている中国で多くの食品ロスが出続けている現実はどうなのだろうと思いました。実際にどれだけの量が出ているかは、調べていないのでわかりかねますが、訪中を終えても継続して考えています。今回の目的の一つ、同世代の中国の方と交流することは、私が想像していた交流とは違っており、中国の文化を体験することができましたが、日本の文化を伝えたり、同世代の方と仲良くなることはできず少し残念でした。小企業のために施設を貸出ししている建物を見学しているとき、まだ日本には進出していないということでしたが、海外に数多く進出する中で、その中に日本が入っていないということは、異本以上にその国に進出することで大きく発展する国があること、逆に言えば日本は第一に出す国ではないということなのかなと感じ、日本なりに日々発展はしていますが発展のどまり、伸びの少なさを感じました。

訪中団の一員として参加させていただいたことで、旅行では経験できないことがたくさんあり、ありがたい気持ちでいっぱいでした。今回の訪中に参加したいという意味をまず行動に移すことができたことが私自身大きな一歩になったのではないかと感じました。そして、中国は一度行ってみるべきだと声を大にして言うことができます。日本でよく聞く中国と中国人のイメージと、実際に中国に行き現地中国を感じることは本当に違って、空気は確かに汚かったけれど、親切な方も多く、温かみを感じました。私の中の言葉でうまく表現することはできませんが、今後の人生で関わりを持つ機会があれば、ぜひ積極的に関わっていきたいと感じました。

「Seeing is believing」 林 陽人

「百聞は一見に如かず」このことわざは、初めて中国を訪れることになった私にとって、適したことわざである。様々なメディアを通して聞いた情報や噂などだけで、中国に対し悪いイメージを抱いていたが、今回の研修で実際に現地へ訪れ、自分の目で確認することで、考えを改めるきっかけとなった。そんな研修で学んだことは大きく2つある。それは「私が見た中国人と中国という国」と「ホスピタリティというものの考え方の違い」についてである。

まず中国人と中国という国についてだ。私は小学生の時に見たサッカーの日本対中国代表の試合で中国という国に対し、マイナスのイメージを抱くようになった。そこにはフェアプレーのかけらも無く、悪質で許し難いプレーだらけだった。しかし大学入学後、中国からの留学生や留学に行った際のホストファミリーが中国の方だったこともあり、少しずつ中国に興味を持ち始めた。日本や中国以外で接する中国人の人は皆優しく接してくれたが、果たして中国国内にいる中国人も変わらないのか疑問だった。結論か

ら言うと、一人一人の性格は異なる。日本人も海外では勤勉と言われているが、全員がそうではないのと同様に中国人にも優しい人もいれば、そうでない人もいた。中国に住んでいた友人から聞いた話では、知らない人には冷たいと聞いていたので、優しい中国人に出会えたことは何よりだった。また中国人の国民性として感じたのは、日本にはない積極性だ。ショッピングセンターでの店員の客の呼び込みや中国人の学生の日本語を学ぶ姿勢などどれも熱意が伝わった。そして中国という国に対しては、「圧倒」この漢字二文字が私にとって適切であった。北京都市部の建物、夜のライトアップ、巨大ビルや大型施設の建設や大きい空港などいろんなモノに圧倒された。中国の経済成長の効果の一部を見ることができた気がした。もっと色々な中国の面を自分の目で見て、確かめたいと感じた。

次にホスピタリティというものの考え方である。私は大学でホスピタリティを専攻している。そのため、日本と中国のホスピタリティの違いを現地で見つけ、理解することが今回の研修の目的の一つであった。中国の友達や前回の参加者のレポートから中国のおもてなしや接客はあまり良くないことがわかっていたので、訪れる前から高い期待値を持っていなかった。実際に訪れて見て特に二つ驚いた出来事があった。一つ目は、空港での入国審査だ。羽田を夜に飛び立ち、中国に着いた私たちは入国審査の長い列に並んだ。私が案内される番になり、誘導に従うとそこは中国国民の専用レーンだった。ここで本当に大丈夫なのだろうかかと戻り、係りの人に確認するともう一度そのレーンまで戻され、しまいには舌打ちまでされた。このおかげで入国審査官の無愛想な表情や態度はなんてことなく感じた。中国に入国して早々に予想を大いに超える洗礼を受けたことは驚いたことの一つであった。もう一つはコンビニに訪れた際の店員の態度だ。入店する前から彼はレジに頭をつけ寝ていた。私がお会計する時は愛想の悪い顔でバーコードを読み取る。お会計を済ますとすぐにまた寝始める。これもまた私が印象に残ったシーンの一つだった。これらだけでなく他にもいくつか日本だったら許され難い行為にいくつか出会った。これはホスピタリティというものの考え方の違いからくるものではないのかと思う。極端なことを言えば、入国審査も入国できればいいし、コンビニも物が変えればいい。しかし今まで他の国々にも訪れたことがあるが、ここまで対応がひどい国はなかった。日本のおもてなしや接客に関しては「過剰」と良い意味で個人的には思っているが、中国に関しては「不足」までは言わないが、足りない部分があると考ええる。しかし中国人にとってはそれが普通なのだろう。今回のこの経験は、両国の違いとホスピタリティについて考え直す良い機会となった。

最後に中国が建国 70 周年、そして日本も新時代である令和 1 年目という節目の年に今回訪中団の一員として中国・北京に行けたこと、日中友好協会をはじめとする多くの関係者の皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。

「訪中団で感じた生の中国と、これから自分ができること」 森崎拓朗

今回、大学生訪中団として初めて、中国を訪問して、個人旅行ではなかなか体験できないこと体験でき、様々なことを感じた。その中で、特に印象に残ったことがいくつかあった。それを書き記したいと思う。

・北京という都市について

北京は 2000 万人の大都市ではあるが、全然大都市という感じがしなかった。また、高層ビルが多く立ち並んでいるにもかかわらず、本当に中国の首都なのかと思うくらい人が少ないように感じられた。大都会は、東京のような人がたくさんいて、開いたスペースがないというイメージだったので、実際の北京の様子を見て驚いた。夜、買い物に外に出た時も人の気配はあまり感じられなかった。真っ直ぐな道路、高層ビル、いうならば未来国家のような感じだった。以前から心配していた大気汚染はそこまで酷くなかったが、視界が少し霞んでいた。

・中国のベンチャー

今回、企業見学として北京のシェアオフィスをベンチャー向けに貸す事業を行っている企業に行った。驚きなのは、その会社は起業初年度に、5億元（80億円）の出資を受けており、そのうちの大部分が中国政府と北京市からのものであったということ。中国の経済的躍進はこういう国家の財政的援助と、若者の意識から生まれているものだと実感した。また、このような経済的支援が受けることができない日本の若者が、中国に流出してしまうのではないかと不安に感じた。自分も将来的に自分のビジネスを始めたいと考えているので、このような中国の恵まれた環境を羨ましく感じた。

・中国のメンツを立てる文化

この訪中団で数多くの人の演説・講演を聞いたが、いずれも相手への感謝を述べるところが5分程もあった。もともと、中国は相手のメンツを重んじる文化だとは聞いていたものの、こんなにすぐ感じるには驚きだった。高校の漢文でも習った三国志の時代でもメンツを重じていたことから、中国の文化の長さを感じた。そして、これから中国で仕事をする時、中国の友人と関わる時、メンツを立てるということを忘れないようにしていきたい。

私は、来年から1年間中国の清華大学に留学予定だ。今、それに向けて準備を行っている途中である。今回の大学生訪中団で、生の中国を体感でき、留学にめけて期待が大きくなる一方、不安も大きくなっている。ただ、今回のプログラムで出会った、北京に留学していた・する予定である人との交流の中で自分のやるべきことが見えた気がした。もっと、中国という国について見てみたいと強く感じた。また、この訪中団で、これまで持っていた中国に対する固定観念に囚われているイメージを払拭できたと思っている。しかし、中国に4日間行っただけでは、絶対に中国という国の本当の姿はわからないと思っているので、留学や今後中国を訪れる機会があるならば、自分から積極的に中国という国について知ろうとし、それを自分の周りに発信することで、固定観念に囚われない中国の姿を共有していきたいと考えている。そして、日中友好を実現していきたい。

「訪中にて学んだこと」 吉田汰生

今回の訪中が初めての中国入国だった私は、今回の経験で中国に関する多くのことを知り、体験し、自身の貴重な経験として良い思い出の作れた場所となりました。まず、私と中国とが初めて触れ合うこととなったのは、私が2018年度に半年間イギリスのリーズ大学に留学していた時でした。そこで何人かの中国人の同じ大学生と知り合い、互いの国の文化や言語、価値観などを共有し、ある程度理解し合えたのを覚えています。他にも現地の中国人コミュニティの存在を知ること、その結びつきの強さ、コミュニティ自体の強さなどを目の当たりにして驚愕しました。これらの経験から、中国に関してもっと深く知りたいなという気持ちが芽生え始め、機会があれば中国にも実際に行ってみたいと思っていました。そこで、この日中友好協会の訪中の話を友達から勧められ、いい経験になるかもしれないと思い参加の応募をしました。訪中前の中国に対するイメージというのは、やはり100%クリーンなものではなかったでしょう。様々な政治問題による日中関係の悪化や、その後の中国内での反日デモの映像がメディアを通じて意識せずとも入っていたため、中国という国に対しては良い印象があまりなかったのが正直なところでした。しかし、前述の通り、個々の中国人と親睦を深めることによってその悪いイメージがあくまで一部であり、メディアによる誇張表現も入っているのだらうとも感じていたのが訪中前の全体としての中国のイメージでした。そして、今回の訪中を経てこのイメージはより確信へと近いものとなりました。今回の訪中ではバスガイドをしてくれた方や現地の大学生、他にもレストラン、コンビニの店員、ホテルの従業員など細かく数えたら多くの中国人の方達と接触する機会がありましたが、そのどれもが私たちを特別視することなく、一人の同じ世界を生きる人間として対等に接してくれたのを感じました。それらの経験で、日本人の中国に対する偏見が勝手に中国に対する良いイメージを築き上げることを阻害しているのではないかとまで思いました。せっかく隣国に位置する国で、日本としても今後の世界で強大な力を持つだろう中国との関係をより良いものにしていくことは最重要課題になり得るものだと私は考えます。そこで私たち大学生などの若い人材が果たす役割とは、現在社会に蔓延る偏見や差別、間違いに対して気づき、正していき、それらがより少なくなる未来へと繋ぐことを果たすことが最も大事なのだらうと思います。そのため、このような若い人材を実際に中国に訪問させて、新たな経験を提供する友好団の存在は欠かせないものであると思います。私個人としても、この5日間の経験というのは、掛け替えのないものとなり、今後の人生において多大な影響を与えることが予想できるでしょう。中国に関する興味は深まるばかりで、今回の訪中では自分が中国語不十分だったためにコミュニケーションが不可能だったことがしばしばあり、次の機会がもしあった時のためにも、中国語を真面目に勉強し始めるのも良いのではないかと思います。